



TITLE:

中国語の結果補語を取る[V-得]文の構造について

AUTHOR(S):

沈, 力

CITATION:

沈, 力. 中国語の結果補語を取る[V-得]文の構造について. 言語学研究
1990, 9: 58-92

ISSUE DATE:

1990-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87953>

RIGHT:

沈 力

1. はじめに
 - 1-1. 研究対象
 - 1-2. 問題提起
 - 1-3. 本論文の提案
2. 「NP1 (VP1) [V-得] (NP2) VP2」の述語動詞について
 - 2-1. [V-得]とVにおける項体系の不一致
 - 2-2. [V-得]とVにおける副詞との共起
 - 2-3. 形式動詞による[V-得]
 - 2-4. 「-得」の動詞的性格
3. 「NP1 (VP1) [V-得] (NP2) VP2」の節について
 - 3-1. NP1とVP1の関係
 - 3-1-1. 受動文の「被」句
 - 3-1-2. 代名詞の指示
 - 3-1-3. ポーズの挿入
 - 3-1-4. VP1に先行する副詞の作用域
 - 3-1-5. コピーの現象
 - 3-2. NP2とVP2の関係
 - 3-2-1. 従来 of 諸説
 - 3-2-2. 本論文の主張
 - 3-2-3. その他の諸現象
4. 結論
 - 4-1. [V-得]文の構造
 - 4-2. 今後の課題

1. はじめに

1-1. 研究対象

中国語の[V-得]文には、[V-得]とその補語(ここでの「補語」は[V-得]の右側の成分を指す)との統語的、意味的な組み合わせによって、いろいろのパターンがある(注1)が、(1)のように、[V-得]文を大きく2つに分類することができる。

- (1)a. 张三 跑得 很累。／張三は走って、とても疲れている。
 b. 张三 跑得 很快。／張三は走るのが速い。

(1a)では、補語である「很累(とても疲れる)」が「跑(走る)」の結果を表すので、それを結果補語と呼ぶ。(1b)では、補語である「很快(とても速い)」が「跑」の様態を表すので、それを様態補語と呼ぶ。(1a)と(1b)は、統語的に二つの点で異なっている。1つは、(1')に示すように、(1a)の補語は節に拡大することができるが、(1b)の補語は節に拡大することができないということである(王1946を参照)。

- (1')a. 张三 跑得 自己很累。／張三は自分が疲れるほど走った。
 b. *张三 跑得 自己很快。／張三は自分が速いほど走った。

もう1つは、(1'')に示すように、(1a)の補語は2語以上からなる単位でなければならないが、(1b)の補語はそのような制限がないということである(呂1963、王・施1990を参照)。

- (1'')a. *张三 跑得 累。／張三は走って、疲れている。
 b. 张三 跑得 快。／張三は走るのが速い。

(1a)と(1b)の分類の基準については、更に、王(1946)、Chao(1968)、Hashimoto(1971)、呂(1963)、Li and Thompson(1981)、田口(1989)を参照されたい。

以上のように、(1a)と(1b)とは異なるので、今回は(1a)のような結果補語を取る[V-得]構文について考察する。

1-2. 問題提起

結果補語を取る[V-得]構文には、(2)のような例がある。

- (2)a. 小明 哭得 张三 很烦。／小明は張三がいやになるほど泣いた。
 b. 小明 唱得 张三 睡不着。／小明は張三が眠れないほど歌った。
 c. 这道菜 吃得 张三 很美。／この料理は張三を満足させた。

(2)の3文は、どれも“NP V-得 NP VP”という形式を持っている。しかし、それぞれの[V-得]のV(以下、[V-得]のVを、単にVと呼ぶ)の性質が異なっている。(2a)の「哭(泣く)」は1項動詞であるのに対して、(2b)の「唱(歌う)」と(2c)の「吃(食べる)」はそれぞれ2項動詞である。また、(2c)の主語が「吃」のpatientであ

るのに対して、(2a)と(2b)の主語は、どちらも「哭」と「唱」のagentである。

(2)のような[V-得]構文について、従来、(3)のように分析されている。

(3) [V-得]構文においては、Vが述語動詞であり、「-得」が補語を導入するマーカ―である。

従来、[V-得]構文では、補語が句なのか節なのか、或いは、「-得」が接辞なのか助詞なのかについて論争があるが、[V-得]のVが述語動詞であることには異論がない。詳しくは、王(1946)、朱・呂(1951)、Chao(1968)、Hashimoto(1971)、呂(1979)、朱(1982)、Huang(1982、1988)、施(1985)、呉(1987)などを参照されたい。以下、従来の(3)の分析をV述語説と呼ぶ。

しかし、V述語説で(2)の3文を分析した場合、少なくとも、2つの疑問点が出てくる。1つは、(2b)の「唱」は2項動詞で、普通、文脈がなければ、(4b)のようにpatientの項の脱落が許されないが、なぜ、「唱」に[-得]が後続する場合には、(2b)のように、そのpatientがなくてもよいのかということである。

- (4)a. 小明 唱 一支歌。 /小明が歌を歌う。
b. ??小明 唱。 /小明が歌う。

もう1つの問題は、(2c)の「吃」は2項動詞で、且つ[-得]がそれに後続する場合、1つの項の脱落が許されるということは「唱」と同じであるが、なぜ、「吃」は「agent 吃 patient」のような普通の項体系があるにもかかわらず、[-得]が後続すると、(2c)のように、そのpatientが主語の位置に来ることが可能であるのかということである。この2つの疑問点をまとめると、(5)になる。

- (5)a. なぜ、(2b)と(2c)のように2項動詞である「唱」と「吃」は、[-得]がそれに後続すると、1項動詞のような振舞いをするのか。
b. なぜ、(2c)の「吃」は、固有の項体系と違って、patientを主語として取りうるのか。

V述語説で(2)の3文を統一的に説明するには、(5)の問題を避けて通ることができないと思われる。

1-3. 本論文の提案

[V-得]文の諸特徴を捉えるために、本論文では、(6)を提案したい。

(6)[V-得]は2つの動詞Vと-得が複合したものである。これは全体で2項動詞である。[V-得]構文において、主語はcauser、補語はresultを表す。

(6)の提案とV述語説との最大の相違は、[V-得]構文では、Vが述語動詞か、それとも、[V-得]が述語動詞かということである。V述語説では、Vのみが述語動詞であるのに対して、(6)の提案では、[V-得]全体が(複合動詞である)述語動詞である。以下、本論文の(6)の提案を、[V-得]述語説と呼ぶ。(5)の問題提起は、Vの項体系が[V-得]になっても変わらないということを前提としているが、(6)のように、Vと[V-得]では、項体系がまったく異なるものと考えれば、(5)の問題は、(6)の観点から見れば、問題とはならない(注2)。

本論文では、(6)の[V-得]述語説が、幅広い現象を説明するのに、V述語説より有効であることを主張する。第2章では、いくつかの現象を観察し、どの現象もVと[V-得]が別の動詞であり、[V-得]構文の述語動詞はVではなく、[V-得]であることを支持するものであることを見る。第3章では、[V-得]文における「NP1 (VP1) [V-得] (NP2) VP2」という形式のNP1とVP1、NP2とVP2の間の関係を観察する。この章でとりあげる現象は、NP1とVP1、NP2とVP2が節であることを示し、[V-得]が2つの項を取るという[V-得]述語説を支持する。第4章では、[V-得]述語説に基いて、新しい[V-得]文の構造を提案する。その新しい構造が、従来の構造より簡潔で説明力を持つことを述べる。

2. 「NP1 (VP1) [V-得] (NP2) VP2」構文の述語動詞について

この章では、3つの現象、すなわち[V-得]とVの項体系の不一致、Vと[V-得]における副詞との共起、形式動詞による[V-得]などを観察し、どの現象も、[V-得]述語説では説明されうるが、V述語説では説明されえないことを主張する。最後に、[V-得]述語説を支持するようなほかの根拠も提出する。

2-1. [V-得]とVにおける項体系の不一致

Vも[V-得]もそれぞれ各自の項体系を持つ。Vは1項動詞、2項動詞、3項動詞などいろいろの場合があるのに対して、[V-得]はつねにcauser、resultという2つの項を持つ2項動詞である。この節では、agent、patientという2つの項を持つVを例として考察しよう。Vの項体系と[V-得]の項体系が(7)に示されている。

- (7)a. agent V patient
 b. causer V-得 result

この節では、(7a)のVが(7b)の[V-得]として用いられると、causerとresultという2つの項を取ると主張する。この問題について、以下2つの点から観察したい。

まず、[V-得]構文では、Vの項は現れなくてもよいが、[V-得]の項は必ず現れるという現象がある。例えば、「写(書く)」の項体系が(8)、「灌(酔わせる)」の項体系が(9)に示される。

(8)a. agent 写 patient

b. 小明 写 論文 / 小明が論文を書く。

(9)a. agent 灌 patient

b. 某人 灌 张三 / 誰かが張三を酔わせる。

しかし、「写」と「灌」が「写得」と「灌得」にして用いられると、(7a)の項体系が崩れてしまい、(7b)の[V-得]の項体系が変わってくる。

(10)a. causer 写得 result

b. 小明 写得 很累。 / 小明が何かを書いて、とても疲れている。

(11)a. causer 灌得 result

b. 这瓶酒 灌得 张三 站不起来。

/ この酒が酔わせて、張三を立たせなくした。

(8b)の「写」が取っているpatient(論文)が(10b)には現われていない。そして、(9b)の「灌」が取っているagent(某人)とpatient(张三)が両方とも(11b)には現われていない。(11b)では、「这瓶酒(この酒)」は「灌」の項ではない。そして、「张三」も「灌」の項ではなく、「站不起来(立てない)」の主語である(これについては、3-2節で詳しく述べる)。とにかく、(10b)(11b)が文法的であるのは、(7b)の項体系を満たしているからである。もし、[V-得]が(7b)の項体系を満たしていなければ、(12)のように、その文が非文法的である。

(12)a. *小明 写得 论文 很累。 / 小明が論文を書いて、とても疲れている。

b. *这瓶酒 灌得 张三。 / この酒が張三を酔わせた。

(10b)(11b)と(12)との文法上の相違は、Vが[V-得]文の述語動詞であるというV述語説で説明すれば、なぜ、Vの項が現れなくてもよいのに対して、[V-得]の項が必

ず現れるのかという問題がある。しかし、[V-得]が[V-得]構文の述語動詞であるという[V-得]述語説で説明すれば、(10b)(11b)が文法的であるのは、[V-得]の2つの項causerとresultが満たされているからであり、(12)が非文法的であるのは、[V-得]の2つの項causerとresultが満たされていないからである。

もう1つの点は、[V-得]構文では、Vのpatientが主語の位置に来ることができる点で普通の語順と異なるが、[V-得]のresultが主語の位置に来ることができない点で普通の語順と同様であるということである。中国語の普通の語順は(13)であり、(14)ではない。

(13)a. agent V patient

b. 张三 吃 这顿饭。 / 张三がこの料理を食べる。

c. 张三 喝 这杯凉茶。 / 张三がこの冷めたお茶を飲む。

(14)a. *patient V agent

b. *这顿饭 吃 张三。 / この料理が张三を食べる。

c. *这杯凉茶 喝 张三。 / この冷めたお茶が张三を飲む。

ところが、「吃」「喝」を「吃得」「喝得」にすると、(13)の項体系が崩れてしまう。(15)(16)を見てみよう。

(15)a. 这顿饭 吃得[张三很美]。 / この料理は张三を満足させた。

b. 这杯凉茶 喝得[张三肚子疼]。 / この冷めたお茶が张三の腹を痛くさせた。

(16)a. * [张三很美] 吃得 这顿饭。

/ 张三が満足したのはこの料理を食べた。

b. * [张三肚子疼] 喝得 这杯凉茶。

/ 张三の腹が痛いのは、この冷めたお茶を飲んだ。

(15a)の「吃」と(15b)の「喝」のpatient「这顿饭」と「这杯凉茶」が主語の位置に来ていることは、普通の語順(13)と異なっている。一方、(16)では、[V-得]の補語が主語の位置に来ることができないことは、普通の語順(13)と同じである。この現象はV述語説では説明できないと思われる。しかし、[V-得]述語説では次のように説明することができる。中国語の基本語順には(13)と平行して、(17)のような語順がある。

(17)a. causer V result

b. 下雪 引起了 交通混乱。／降雪が交通の混乱を引き起こした。

(18)a. *result V causer

b. *交通混乱 引起了 下雪。／交通の混乱が降雪を引き起こした。

(18)からわかるように、(17a)に違反する文は非文法的である。[V-得]は(17)の語順を持っている。(15)が文法的であるのは、(17a)の語順に従っているからであり、(16)が非文法的であるのは、(17a)に従っていないからである。

以上、Vと[V-得]のそれぞれの項体系が一致しないことを見てきた。もし、Vが述語動詞であるというV述語説で説明するならば、なぜVの項が[V-得]では欠如したり、語順が変わったりするのかという問題がある。つまり、V述語説では、Vの項体系が[V-得]構文でも引き継がれるはずという予想が当然なりつつが、そうはならない。つまり、Vの語彙的特性としての項体系が「-得」が付くことで崩れてしまうということである。もし、[V-得]が述語動詞であるという[V-得]述語説で説明するならば、[V-得]とVは別の動詞であるから、V述語説の問題が問題にならない。つまり、[V-得]の2つの項さえ満たせば、Vの項があってもなくてもよいし、語順が変わっても変わらなくてもよいということである。

次に、副詞の共起関係から、Vと[V-得]の相違を見よう。

2-2. [V-得]とVにおける副詞との共起

この節では、[V-得]文の文法的であるためには、副詞が[V-得]と共起可能であることが必要であるという事実を取りあげたい。まず、Vと共起可能な副詞は[V-得]とも共起可能であるとは限らない。例えば、「拼命(懸命に)」と「狠狠地(ひどく)」は意志的な働きかけを表すような副詞である。そのような副詞と共起可能な動詞(19)の「闹」「打」は意志的な動詞である。

(19)a. 张三 拼命 闹。 ／张三が懸命に騒いだ。

b. 张三 狠狠地 打 小明。／张三がひどく小明を殴った。

一方、そのような副詞と共起不可能な動詞「闹得」「打得」は無意志的な動詞である。

(20)a. *张三 拼命 闹得 我一夜没睡觉。

／张三が懸命に騒いで私を一晩中寝させなかった。

b. *张三 狠狠地 打得 小明站不起来。

／張三がひどく小明を殴って、小明が立てなくなった。

V(闹、打)と[V-得](闹得、打得)の間における副詞との共起の可能性の不一致はVと[V-得]は別の動詞であることを示している。そして、[V-得]構文が文法的であるためには、副詞が[V-得]と共起可能であることが必要である。これは、[V-得]構文では、Vのみではなく、[V-得]が述語動詞であることを示している。

次に、Vとも[V-得]とも共起可能な副詞が、[V-得]を修飾するのであって、Vのみを修飾することはないという事実がある。(21)と(22)を見てみよう。

(21)a. 张三 已经哭得 我一夜没睡觉了。

／張三が泣いて、すでに私を一晩中寝させないでいた。

b. 张三 已经哭了。 ／張三がすでに泣いた。

c. 我 已经 一夜没睡觉了。 ／私はすでに一晩中寝ないでいた。

(22)a. 张三 没打得 小明站不起来。

／張三が小明を殴って、小明が立てなくなったことはない。

b. 张三 没打 小明。 ／張三が小明を殴らなかった。

c. 小明 没 站不起来。 ／小明が立てないことはない。

(21a)で「すでに」発生した出来事は(21b)ではなく、(21c)である。(22a)で否定した出来事は(22b)のようではなく、(22c)のようである。(21)の「已经(すでに)」が「哭得」と共起する場合、「哭」を修飾せず、「哭得」を修飾する。(22)の「没(否定)」が「打得」と共起する場合、「打」を修飾せず、「打得」を修飾する。

以上、Vと共起可能な副詞が[V-得]文で[V-得]と共起可能とは限らないことと、Vとも[V-得]とも共起可能な副詞が[V-得]文で[V-得]を修飾し、Vを修飾しないという現象は、Vと[V-得]は別の動詞であり、[V-得]文では、[V-得]が述語動詞であることを示唆する。

2-3. 形式動詞による[V-得]

ここで、具体的意味を持たない動詞を形式動詞と呼ぶ。中国語には、形式動詞として「弄」「搞」(する、やる)がある。例えば、(23)の「闹(騒ぐ)」「打(殴る)」「下(降る)」「呆(いる)」は具体的な意味内容を持つ動詞であるが、それらは、(24)のように、形式動詞「弄」「搞」に替えることが可能である(もちろん、元のVの具体的な意味が落ちる)。

(23)a. 张三 闹得 我 一夜没睡觉了。

／張三が騒いで、私を一晩中寝させなかった。

b. 张三 打得 小明 站不起来了。

／張三が小明を殴って、小明が立てなかった。

c. 这场雨 下得 我没法出门。

／この雨のために、私はでかけられない。

d. 这间房子 呆得 我心发窄。

／この家にいると、私は息ぐるしくなる。

(24)a. 张三 搞得 我一夜没睡觉了。

／張三が(何かをして)私を一晩中寝させなかった。

b. 张三 弄得 小明站不起来了。

／張三が(何かをして)小明を立ち上がらせなかった。

c. 这场雨 搞得 我没法出门。

／この雨のために、私はでかけられない。

d. 这间房子 弄得 我心发窄。

／この家は、私を息ぐるしくさせた。

しかし、Vのみが述語動詞である構文では、「闹」「打」「下」「呆」は形式動詞に変えることができない。(25)と(26)を見てみよう。

(25)a. 张三 闹了。

／張三が騒いだ。

b. 张三 打了 小明。

／張三が小明を殴った。

c. 下 雨了。

／雨が降った。

d. 我 呆 在这间房子里。／私がこの部屋にいる。

(26)a. *张三 搞了。

b. *张三 弄了 小明(注3)。

c. *搞 雨了。

d. *我 弄 在这间房子里。

以上の事実は、[V-得]構文においては、「-得」がその構文を成立させていることを示している。(24)の場合、「-得」が単独で生起することができないので、[V-得]という形を保つために、具体的な意味のない形式動詞を用いると考えられる。

[V-得]のVを述語動詞と考えるV述語説で以上の現象を説明すれば、(24)の述語動詞と(26)の述語動詞が同じであり、(24)が文法的であるから、(26)が当然文法的であるはずである。ところが、(26)が非文法的であるので、説明不可能である。

以上の3つの現象はどれも、[V-得]述語説を支持するものと思われる。しかし、[V-得]述語説では、[V-得]を複合動詞、すなわち、「-得」を動詞と考えているのだが、従来、「的」「地」「得」の3つは、発音が同じであり、軽声であり、拘束形式であるという共通点があるので、すべて助詞か接辞と見られているという問題がある。次の節で、この問題について考えよう。

2-4. 「-得」の動詞的性格

「-得」は形態的に拘束形式であり、独立して存在できない。このため、従来の研究においては、助詞や接辞として扱われてきたが(注4)、本論文では「-得」を動詞として考える。以下の事実がこの主張を支持する。

第1に、「地」「的」と違って、「得」には本動詞déとしての使い方がある。例えば、現代汉语词典(1979)には、(27)のような意味があげられている。

(27)a. 何かを手に入れる。

b. 演算してある結果を得る。

(27')a. 他 得了 一个儿子。 / 彼が息子を得た(彼に息子が生まれた)。

b. 二三 得六。 / 二かける三は六。

「得(dé)」には、(27)に示すように、「誰か(何か)が何かを得る」という2項動詞の使い方がある。この事実から、「得(dé)」と対応する「-得(de)」も「誰か(何か)が何らかの結果を得る」という意味を持つ2項動詞であると考えられることも可能であろう。

第2に、[V-得]の構造と、V2が結果を表す[V1-V2]複合動詞の構造との間に平行性がある。(28)の[V-得]と、(29)の[V-伤]という[V1-V2]の複合動詞を比較してみよう。

(28)a. 小明 哭得 张三 很烦。 / 小明は泣いて張三を煩わした。

b. 小明 唱得 张三 睡不着。 / 小明が歌って張三が眠れない。

c. 这句话 说得 张三 很伤心。 / この言葉が張三を悲しませた。

(29)a. 小明 哭伤了 身子。 / 小明が体を損ねるほど泣いた。

- b. 小明 唱伤了 底气。 / 小明が歌って腹に力が入らなくなった。
 c. 这句话 说伤了 张三的心。 / この言葉が張三を悲しませた。

両構造の平行性は明かであろう。(28a/29a)の「哭」は1項動詞であるのに対して、(28b/29b)の「唱」と(28c/29c)の「吃」はどちらも2項動詞である。また、(28c/29c)の主語が「吃」のpatientであるのに対して、(28a/29a)と(28b/29b)の主語はそれぞれ「哭」と「唱」のagentである。一方、「-得/-傷」の性質が3文とも不変である。この平行性は、[V-得]が、V2が結果を表す[V1-V2]複合動詞の1例であることを示している。

第3に、2-2.節で[V-得]が無意志的だと記述したが、この性質は、実際の存在物を得るという「得(dé)」の用法によっても裏付けられる。(30)の「得(得る)」と「争(要求する)」を比較してみると、「得」が無意志的であるので、(31a)のように、「拼命(懸命)」の修飾を受けないが、「争」が意志的であるので、(31b)のように、「拼命」の修飾を受ける。

- (30)a. 张三 得了 奖金。 / 張三がボーナスを得た。
 b. 张三 争了 奖金。 / 張三がボーナスを要求した。
- (31)a. *张三 拼命 得了 奖金。 / 張三が懸命にボーナスを得た。
 b. 张三 拼命 争了 奖金。 / 張三が懸命にボーナスを要求した。

(31)の例は、「実際の存在物を得る」という意味を持つ動詞「得dé」は無意志的であるという点で、[V-得]の「-得」と関係があることを示している。

この章では、Vと[V-得]における1.項体系の不一致、2.副詞との共起、3.形式動詞との交替、そして4.「-得」の動詞的性格などを観察したが、どの現象も[V-得]構文の述語動詞がVのみではなく、[V-得]全体であることを支持する。

3. 「NP1 (VP1) [V-得] (NP2) VP2」の節について

前章では、[V-得]構文の述語動詞が[V-得]であることを見てきた。この章では、[V-得]構文を更に詳しく見る。3-1.節で、NP1とVP1、3-2.節で、NP2とVP2の関係を検討する。

3-1. NP1とVP1の関係

この節では、以下のような、[V-得]の左側にVP1があるような例について考える。

(32)a. 小明 唱歌 唱得 张三 很烦。

／小明が歌を歌って、張三をいやにさせた。

b. 小明 骑摩托 骑得 张三 睡不着。

／小明がバイクに乗って、張三を寝させなかった。

c. 小明 提问题 提得 张三 答不上来。

／小明が質問して、張三を答えられなくさせた。

(32)のような構文について、V述語説では、同じVが2つあることに注目し、その同じ2つのVの間に、コピーまたは反復が起こると説明されている(Huang 1982、Li 1990)。この節では、いくつかの現象を観察し、その結果、どの現象も、NP1とVP1が節を形成していることを示す。[V-得]がcauserとして節を取っていると考えなければ、これらの現象が説明できないことを主張する。最後に、V述語説で注目されていたコピーまたは反復が、[V-得]構文には実際に存在していないことを主張する。

3-1-1. 受動文の「被」句

中国語の受動文は、英語、日本語と同じように、それぞれの対応する能動文の主語が、受動文では「被(によって)」によってマークされる。ここで「被+対応する能動文の主語」のことを「被」句と呼ぶ。大体、「被」句と述語動詞の間に、その間の境界線を示すためか、「给」を挿入することがある。「被+名詞句」と述語動詞の間に、「给」が任意に挿入されるが、「被+節」と述語動詞の間に、「给」が挿入される傾向が強い。次の例を見てみよう。

(33)a. 张三教的学生 吵醒了 小明。

／張三の教え子が小明的目を覚ました。

b. 小明 被张三教的学生 (给) 吵醒了。

／小明が張三の教え子に目を覚まさせられた。

(33a)は能動文である。それと対応する受動文は(33b)である。(33a)の主語が名詞句なので、(33b)に示すように、「给」は任意に挿入される。しかし、次の例を見てみよう。

(34)a. [张三打电话] 吵醒了 小明。

／張三が電話をかけて、小明的目を覚ました。

b. ?小明 被[张三打电话] 吵醒了。

／小明は張三が電話をかけることによって、目を覚まさせられた。

- c. 小明 被[张三打电话] 给 吵醒了。
／同上。

もし(34a)のように、能動文の主語が節([]で示す)であれば、それと対応する受動文の「被」句に「给」が後続する傾向が強い。(34c)と比べて、(34b)の適格性が低いのはそのためであると思われる。

この節では、「给」の形式を用いて、[V-得]構文におけるNP1とVP1の関係を観察する。次の受動文の「被」句を見よう。

- (35)a. 小明 被[张三打电话] 给 打得 一夜没睡觉。
／小明は、張三が電話をかけたので、一晚中寝られなかった。
b. *小明 被张三 给 打电话 打得 一夜没睡觉。
／同上。

- (36)a. 张三 被[小明唱歌] 给 唱得 烦极了。
／張三は、小明が歌を歌うので、いやになった。
b. *张三 被小明 给 唱歌 唱得 烦极了。
／同上。

- (37)a. 小明 被[张三讲故事] 给 讲得 泪流满面。
／小明は、張三が物語を話したので、涙があふれた。
b. *小明 被张三 给 讲故事 讲得 泪流满面。
／同上。

もし、「给」を「被」句と述語句の間に挿入することが「被」句と述語動詞との境界線を示すためであると考えれば、この現象は「张三打电话」「小明唱歌」「张三讲故事」それぞれの全体が一つの単位として「被」の目的語であることを示すことができる。従って、それらの受動文と対応する能動文(38)の「张三打电话」「小明唱歌」「张三讲故事」は、どちらも一つの単位として主語となっていると言えよう。

- (38)a. [张三打电话] 打得 小明 一夜没睡觉。
／張三が電話を掛けた結果、小明が一晚中寝なかった。
b. [小明唱歌] 唱得 张三 烦极了。
／小明が歌を歌って、張三を煩わした。

c. [张三讲故事] 讲得 小明 泪流满面。

／张三が物語を話して、小明を泣かした。

[V-得]文における「被」句に節がありうるということは、それと対応する能動文の主語が節であるということである。[V-得]文に節主語があることは、[V-得]動詞が節をcauserとして取るという[V-得]述語説を支持する。もし、Vが[V-得]文の述語動詞であるというV述語説で説明すれば、agentを取る「打」「唱」「讲」が、(38)において、agentがとれなくなるという不都合な結論になってしまう。

3-1-2. 代名詞の指示

単文において、代名詞の指示物はその代名詞の同節要素 (clause-mate) であつてはならないとされている。さらに厳密な定義に基づく説明はChomsky(1981)他を参照されたい。(39)を見てみよう。

(39)a. 张三_i 责怪 他_{*i/j}

／张三が彼を責める。

b. [张三_i 留学] 对他_{i/j} 不利。

／张三が留学することは、彼にとって不利である。

(39a)では、単文に現れる「他」の指示物は当該文の主語であつてはならない。しかし、(39b)のような「他」の指示物は節内の「张三」であつてもよい。なぜならば、当該文の主語は[张三留学]という節であり、その「张三」は他の節の「他」の同節要素ではないからである。この規則によって、NP1とVP1が節なのかどうかを識別できると予想される。

(40)a. 张三_i 唱得 他_{*i/j} 很美。／张三が歌って、彼を快くさせた。

b. [张三_i 唱歌] 唱得他_{i/j} 很美。／张三が歌を歌うことは彼を快くさせた。

(41)a. 张三_i 问得 他_{*i/j} 筋疲力尽。／张三が質問して、彼を疲れさせた。

b. [张三_i 问问题] 问得 他_{i/j} 筋疲力尽。

／张三が質問することは、彼を疲れさせた。

(40a)の「张三」が文全体の主語であるため、「他」と「张三」が1つの節にある。つまり、「张三」が「他」の同節要素である。そのために、「他」の指示物は「张三」ではありえない。一方、(40b)の場合、「张三」が「他」の同節要素ではない

ので、「他」の指示物は「张三」であってもよい。(41)も同じことである。

「NP1 (VP1) [V-得] (NP2) VP2」という構文では、NP2としての「他」の指示物がNP1であることは、NP1とVP1が節を成していることを意味する。これは、[V-得]文には節としての主語が存在することを支持する。前節の被フレーズと並んで、この現象も、[V-得]の左側に1つの項しかなく、本論文の[V-得]述語説が正しいことを支持する。

3-1-3. ポーズの挿入

Huang(1982)は、(42)のように、VP1と[V-得]の間にポーズ(^)があることを観察している。

(42)我骑马 ^ 骑得很累。 / 私は馬に乗って、とても疲れている。

この観察は、(43)の提案を支持するとHuang(1982)が主張している。(43)の構造では、そのポーズが「骑马」という動詞句(V')と「骑得很累」という動詞句(V')が動詞連続(V'')を形成していることを表すと見ている。

(43)[S[NP 我] [V''[V' 骑马][V' 骑得很累]]]

しかし、中国語では、ポーズが動詞連続内部の動詞句と動詞句の間に挿入されるより、主語と述語の間に挿入されることが(44)と(45)からわかる。

(44)a. 我 ^ 洗衣服做饭。 / 私は洗濯して御飯を作る。

b. ??我洗衣服 ^ 做饭。 / 同上。

(45)a. 我 ^ 去学校学习。 / 私は学校に行って勉強する。

b. ??我去学校 ^ 学习。 / 同上。

もし、この観察が正しいならば、Huang(1982)の[V-得]文の観察は、(43)の提案を支持するのではなく、本論文の提案する節主語という分析から得られる(46)を支持することになる。

(46)[S[S[NP 我][VP 骑马]] [VP 骑得很累]]

(46)では、「我骑马」と「骑得很累」が主述関係になっているので、ポーズが挿

入されるのは、自然である。

3-1-4.VP1に先行する副詞の作用域

「拼命」という副詞には、その作用域が節を越えられないという特性があるので、この節では、その特性を利用して、[V-得]文のNP1とVP1が節を形成しているかどうかを調べる。結論を先に言えば、VP1の直前に位置する「拼命」の作用域がVP1にとどまり、[V-得]には及ばないということになる。これは、NP1とVP1が節を形成していることを示している。

まず、「拼命」の作用域が節を越えられないことを見てみよう。

- (47)a. 小明 拼命 要求[作工作]。／小明は仕事をするよう懸命に要求した。
b. 小明 要求 [拼命作工作]。／小明は懸命に仕事をするよう要求した。

(47)の[]の部分は節である。(47a)の「作工作(仕事をする)」と(47b)の「拼命作工作(懸命に仕事をする)」のagentは「小明」でも他の誰かであってもよい。日本語訳からわかるように、(47a)にも(47b)にも「小明が懸命に仕事をするように、懸命に要求する」という意味を持たないことから、「拼命」が節の境界線を越えられないことがわかる。同様に、もし、[V-得]文のNP1とVP1が節であれば、VP1の直前に位置する「拼命」の作用域がVP1を越えられないことが予測される。次に[V-得]文を考察しよう。

「拼命」という副詞が[V-得]と共起しないことは、(48)に示す例からわかる。

- (48)a. *小明 拼命 唱得 张三很烦。
／小明が懸命に歌って、張三がいやになった。
b. *小明 拼命 问得 张三答不上来。
／小明が懸命に聞いて、張三が答えられなかった。

しかし、VP1に先行する「拼命」は、[V-得]文の文法性に影響がない。(49)を見てみよう。

- (49)a. 小明 拼命 唱歌 唱得 张三很烦。
／小明が懸命に歌を歌って、張三がいやになった。
b. 小明 拼命 问问题 问得 张三答不上来。
／小明が懸命に質問をして、張三が答えられなかった。

(49)では、「拼命」の作用域が[V-得]に及ばない。このことは、VP1「唱歌」「问问题」が、統語的に「唱得」「问得」と関係なく、NP1「小明」と共に節を形成していると考えれば、説明することができる。もし、(50)のように、「拼命」がVP1の直前ではなく、[V-得]の直前ならば、その文は依然として非文法的である。

(50)a. *小明 唱歌 拼命唱得 张三很煩。

／小明が歌を歌って、懸命に张三がいやになる結果を得た。

b. *小明 问问题 拼命问得 张三答不上来。

／小明が質問をして、懸命に张三が答えられない結果を得た。

また、Li(1990)は、(50)のような文では、VP1のV「唱」「问」が、[V-得]のVからコピーされて、あたかも前置詞のように「歌」「问题」に格を与える働きをしていると主張している。しかし、本節では、前置詞句と動詞句には副詞の作用域がそれを越えられるかどうかという点で、相違があるということを強調したい。例えば、中国語の前置詞には(51)のような「把(を)」がある。

(51)a. 小明 把张三 唱得很煩。

／小明が歌って、张三をいやにさせた。

b. 小明 把张三 问得答不上来。

／小明が質問して、张三を解答できなくさせた。

「把」句は述語として節を作ることはないから、それに先行する「拼命」の作用域が「把」句を越えて本動詞に及ぶと予想することができる。(52)と(53)を比べてみよう。

(52)a. *小明 拼命 把张三 唱得很煩。

／小明は懸命に歌って、张三をいやにさせた。

b. *小明 拼命 把张三 问得答不上来。

／小明は懸命に質問して、张三を解答できなくさせた。

(53)a. 小明 拼命 把张三 表扬了一番。 ／小明は懸命に张三をほめた。

b. 小明 拼命 把张三 批评了一番。 ／小明は懸命に张三を叱った。

(52)の2文が非文法的であるのは、前述したように、「拼命」が[V-得]と共起不可能だからであり、(53)の2文が文法的であるのは、「拼命」が「表扬」「批评」

と共起可能だからである。(52)と(53)の文法性の違いから、副詞の作用域が「把」句を越えて、動詞に及ぶことがわかる。更に、(49)と(52)を比べてみると、(49)が文法的であるのは、「拼命」の作用域がVP1にとどまり、[V-得]に及ばないからであるが、(52)が非文法的であるのは、「拼命」の作用域が「把」句にとどまらず、[V-得]に及ぶからである。

VP1に先行する副詞の作用域がVP1を越えないが、前置詞句に先行する副詞の作用域が前置詞句を越えるという現象は、VP1が前置詞句ではなく、述語動詞であるという観察を支持する。最終的には、NP1とVP1が節となって、[V-得]の項causerとなるという[V-得]述語説が正しいことを示している。

しかし、[V-得]述語説にも、なぜ、VP1のVと[V-得]のVが同じ動詞であるのかという問題がある。次の節でこの問題について考えよう。

3-1-5. コピーの現象

Hashimoto(1971)、Huang(1982)、Li and Thompson(1981)、Li(1990)は、(54)(=(32))のVP1のVと[V-得]のVが同じ動詞「唱」「騎(乗る)」「提(出す)」であることに注目し、それがコピーの現象であるという見解を示している。

(54)a. 小明 唱歌 唱得 张三 很煩。

／小明が歌を歌って张三をいやにさせた。

b. 小明 骑摩托 骑得 张三 睡不着。

／小明がバイクに乗って张三を寝させなかった。

c. 小明 提问题 提得 张三 答不上来。

／小明が質問して张三を答えられなくさせた。

ただ、コピーの方向には異論がある。Hashimoto(1971)、Huang(1982)、Li and Thompson(1981)は、後方へコピーすると主張し、Li(1990)は複合動詞の研究で、前方へコピーすると主張している。しかし、コピーでは、扱いきれない現象が存在する。1つは、(54)の[V-得]が意味を変えず、(55)のように、「弄得」によって代替されるということである。「弄」と「唱」「騎」「提」がコピーによる関係とは考えられない

(55)a. 小明 唱歌 弄得 张三很烦。 /cf. (54a)

b. 小明 骑摩托 弄得 张三睡不着。 /cf. (54b)

c. 小明 提问题 弄得 张三答不上来。 /cf. (54c)

もう1つは、(54)の[V-得]のVが、先行のVP1のVと同じでなくても、そのVP1と意味的に関係のある他のVによって代替されうることである。(56)を参照されたい。

(56)a. 小明 唱歌 喊得 张三很烦。

／小明が歌を叫ぶように歌って張三をいやにさせた。

b. 小明 骑摩托 震得 张三睡不着。

／小明がバイクに乗って響かせて張三を寝させなかった。

c. 小明 提问题 问得 张三答不上来。

／小明が質問して問うて張三を答えられなくさせた。

(56)の「喊(叫ぶ)」「震(震動する)」「问(問う)」は意味的にそれぞれ「唱歌」「骑摩托(バイクに乗る)」「提问题(質問する)」と関連している。これらの例から分かるように、[V-得]文の構造におけるコピーの存在は疑わしい。さらに、(57)を見られたい。

(57)a. 小明 追汽车 追得 满头大汗。

b. 小明 追汽车 弄得 满头大汗。

c. 小明 追汽车 跑得 满头大汗。

／小明が車を追って、汗びっしょりになった。

(57)では、[-得]に先行するVが異なる動詞であるにもかかわらず、3つの文は同じ意味を表す。これは、動詞コピー説では説明できない現象である。動詞の反復は統語レベルでのコピーとして存在するのではなく、節主語内部のVP1と[V-得]の共起の可否が、意味解釈のレベルでチェックされると考えることが妥当であろう。

この考えで(57)を説明すれば、以下のようなになる。(57a)が文法的であるのは、[V-得]のVと節主語のVが同じ意味を持っているからである。(57b)が文法的であるのは、[V-得]のV「弄」が意味内容を持たないので、様々な節主語のVと共起することができるからである。(57c)が文法的であるのは、節主語のV「追」に[V-得]のV「跑(走る)」の意味が含意されているからである。もし、[V-得]のVが「走(歩く)」であれば、(57c)が(58)のように非文法的になる。

(58)*小明 追汽车 走得 满头大汗。

／小明が車を追って、歩いて汗びっしょりになった。

本節では、VP1のVと[V-得]がそれぞれもともとある動詞であって、コピーによってできたものではないことを主張した。従って、(54)の3文のNP1とVP1を節主語として分析することができる。

3-1.節では、「被」句、代名詞の指示、ポーズの挿入、VP1に先行する副詞の作用域などの現象を観察し、どの現象も、[V-得]文には節主語が存在するという主張の根拠となることを見た。つまり、本論文の[V-得]述語説はこれらの現象を無理なく説明できると言える。最後に、[V-得]述語説の反論にもなりうるコピーの現象が実は存在しないことを観察した。次の3-2.節では、NP2とVP2の関係を考えよう。

3-2. NP2とVP2の関係

3-1.節では、「NP1 (VP1) [V-得] (NP2) VP2」という構文のNP1とVP1の関係を考察したが、この節では、NP2とVP2の間の関係を中心に、NP2とVP2が節として[V-得]の補語となっているのか、それともNP2が[V-得]の目的語で、VP2が[V-得]の補語なのかという問題を考えていきたい。3-2-1.節では従来の諸説を紹介し、3-2-2.節では本論文の主張を提出して、3-2-3.節では一見本論文の主張を支持しない現象を考察する。

3-2-1. 従来の諸説

[V-得]に後続する部分が句であるか節であるかということは従来から問題になっている。そして、従来の諸説を2つにまとめることができる。

A. [V-得]に後続する部分は節であるという説(A説)

この説は王(1946)によって提案されたもので、Chao(1968)、Hashimoto(1971)、Huang(1982)も支持している。(59)はこの説を支持する重要な根拠となる例である。

- (59)a. 小明 哭得[张三 很烦]。 / 小明は張三がいやになるほど泣いた。
b. 小明 唱得[张三 睡不着]。 / 小明は張三が眠れないほど歌った。
c. 这顿饭 吃得[张三 很美]。 / この料理は張三を満足させた。

(59)では、NP2の「张三」が[V-得]のV「哭」「唱」「吃」の目的語ではなく、それぞれのVP2「很烦」「睡不着」「很美」の主語である。このほかに(60)のような例もある。

- (60)a. 张三 喝得 [φ 大醉]。 / 張三は酔っぱらうほど飲んだ。
a'. 张三 喝得 [自己大醉]。 / 張三は自分が酔っぱらうほど飲んだ。

- (63)a. 张三 被小明 哭得 很烦。 / 張三が小明に泣かれていやになった。
 b. 张三 被小明 唱得 睡不着。 / 張三が小明に歌われて眠れない。
 c. 张三 被小明 打得 站不起来。 / 張三が小明に殴られて立てない。

「张三」が「把」によって[V-得]に前置できることと、受動文の主語になれることは、「张三」が[V-得]の目的語であることを証明すると考えられている。

3-2-2. 本論文の主張

本論文では、A説の立場に立ち、[V-得]に後続するNP2とVP2が節であることを主張する。以下の現象がこの主張を支持する。(64'a)で示しているように、「酒」が「喝(飲む)」の目的語であり、「大醉(酔っぱらう)」の主語ではないので、(64a)は非文法的である。(64b)(64c)も同じである。

- (64)a. *张三 喝得 酒 大醉。 / 張三が酒を飲んで酔っぱらった。
 b. *张三 看得 戲 很烦。 / 張三が芝居をみていやになった。
 c. *张三 骑得 摩托 很累。 / 張三がバイクに乗って疲れた。

- (64')a. 喝酒 [V O関係] *酒大醉 [S V関係] cf. (64a)
 b. 看戲 [V O関係] *戲很烦 [S V関係] cf. (64b)
 c. 骑摩托 [V O関係] *摩托很累 [S V関係] cf. (64c)

一方、(65'a)に示しているように、「自己」が「喝」の目的語ではなく、「大醉」の主語であるので、(65a)が文法的である。(65b)(65c)も同じである。

- (65)a. 张三(喝酒) 喝得 自己 大醉。 / 張三が酒を飲んで自分が酔っぱらった。
 b. 张三(看戲) 看得 自己 很烦。 / 張三が芝居を見て自分がいやになった。
 c. 张三(骑摩托) 骑得 自己 很累。 / 張三がバイクに乗って自分が疲れた。

- (65')a. *喝自己 [V O関係] 自己大醉 [S V関係] cf. (65a)
 b. *看自己 [V O関係] 自己很烦 [S V関係] cf. (65b)
 c. *骑自己 [V O関係] 自己很累 [S V関係] cf. (65c)

つまり、[V-得]に後続するNP2とVP2との間に主述関係が成立するという条件を満たせば、結果補語を取る[V-得]構文の文法性が保たれるが、逆に、そのような主述関係が成立するという条件が満たされなければ、たとえNP2が[V-得]のVの目的語に

なっても、結果補語を取る[V-得]構文の文法性が保たれないのである。

B説では、(64)と(64')のように、[V-得]のVの目的語が[V-得]に後続する場合、VP2の主語とならないならば、なぜその文が非文法的になるのか、逆に(65)と(65')のように、なぜVP2の主語になるNP2は[V-得]のVの目的語でなくてもよいのかという問題は説明しにくいであろう。

A説をとるには、以下の2つの問題を説明しなければならない。1. 朱(1982)の観察したポーズ挿入の現象をどう見るのか、2. 朱(1982)の観察した「把」構文と受動構文の現象をどう見るのかということである。

まず、ポーズ挿入の観察(朱1982)を考えよう。ここで強調したいのは、動詞とその右側の位置にある名詞句との間にポーズがなくても、その名詞句が必ずしも目的語とは限らないということである。次の(66a)と(66b)は、2つの共通点がある。

(66)a. 张三喜欢小明 ^ 诚实。 a'. *张三喜欢 ^ 小明诚实。

／張三が小明の正直さが好きだ。

b. 张三哭得小明 ^ 很烦。 b'. *张三哭得 ^ 小明很烦。

／張三が小明が嫌なほど泣いた。

1つは、主動詞とそれに後続する名詞句との間にポーズが入らないということ、もう1つは、「小明」とその後のVP2との関係は主述関係であるということである。しかし、(66a)と(66b)は、(67)のように、「小明」がその前の動詞の目的語になりうるかどうかによって相違点が現れる。

(67)a. 张三 喜欢 小明。 /張三が小明が好きだ。

b. *张三 哭得 小明。 /張三が泣いて、小明が…。

明らかに、(67a)の動詞「喜欢(好き)」は目的語を取るが、(67b)の動詞「哭得」は目的語を取らない。従って、(66a)の「小明」はVP2「诚实」の主語であると同時に主動詞「喜欢」の目的語でもある、すなわち、兼語であると考えてもいいし、「喜欢」の性質として目的語としてNPも、節も取ると考えてもよい。一方、(66b)の「小明」はVP2「很烦」の主語であるが、主動詞の目的語ではない。従って、ポーズ挿入の現象は目的語以外の観点から考えるべき現象である。

Huang(1982)、Li(1990)、望月(1990)に従い、中国語でも(抽象的な)格が存在すると仮定すれば、ポーズの問題は、格にかかわる現象であると考えてもできる。このような格の概念についての詳細はChomsky(1981)他を参照されたい。

NP2が主動詞から格を付与されると分析される現象は英語、日本語にも見られる。

つまり、中国語の(61)(66)(67)も他言語の(68)(69)と平行的に取り扱うことが可能である。(68a)と(69a)のVP2の主語はそれぞれ主格でマークされているが、(68b)と(69b)のVP2の主語はそれぞれ対格でマークされている。

(68)a. John believes that [he is honest].

b. John believes [him to be honest].

(69)a. 太郎は〔花子が正直だ〕と思っている。

b. 太郎は〔花子を正直だ〕と思っている。

中国語の(66)も同様に説明できる。つまり(66b')の[V-得]と「小明」との間にポーズが挿入できないということは、英語の「him」という対格、日本語の「花子を」のヲ(対)格と平行して、NP2「小明」が[V-得]から対格を付与されていることを意味するとも考えられる。故に、ポーズの問題は格(付与)の問題として扱うこともできるのであるから、[V-得]に後続するNP2が目的語であるとは、言い切れないことになる。

さらに、朱(1982)の(62)「把」構文と受動文に関する観察も対格に関する現象として考えられる。例えば、(70)の「把」は対格のマーカーであり、統語的にポーズ挿入とほぼ同じ役割を果たす。

(70)a. 张三哭得小明 ^ 很烦。

b. 张三 把小明 i 哭得 [ϕ i 很烦]

一方、対格を付与される節の主語は受動文の主語にもなりうる。(68b)が(71a)と、(69b)が(71b)と、(70)が(71c)とそれぞれ対応する。

(71)a. He i is believed [ϕ i to be honest].

b. 花子 i が太郎に [ϕ i 正直だ] と思われている。

c. 小明 i 被张三 哭得 [ϕ i 很烦]

以上のように、朱(1982)の現象は必ずしもA説にとっての問題とはならない。以上の分析から、NP2とVP2が節であるという主張が妥当性を欠くものではないことが窺知されるであろう。

3-2-3. その他の諸現象

NP2とVP2が節であるという主張に対して、一見支持しない2つの現象がある。第

1 に、[V-得]に後続する部分に主述関係があるとは限らない(丁1989)。

- (72)a. 张三 等得 小明 好苦阿！ / 張三が小明を待つのがどんなにつらいか。
b. 张三 恨得 小明 了不得。 / 張三が小明をたいへん恨んでいる。
c. 张三 包得 饺子 快极了。 / 張三がギョウザをととても速く包む。

- (72')a. *小明 好苦阿 / 小明がどんなに苦しいか。
b. *小明 了不得 / 小明が大変だ。
c. *饺子 快极了 / ギョウザがとても速い。

(72)は、[V-得]に後続するNP2とVP2の間に、(72')に示すように、主述関係がない例である。これは、本論文の主張の反例に見えるが、しかし、これらの例は、結果補語ではなく、様態補語を取る[V-得]文に関する例である。これは、VP2がそれより左側にある最も近い名詞句について叙述するかどうかで分かる。結果補語の場合、VP2は左側の最も近い名詞句について叙述するのであるが、様態補語の場合は、そうではない。次の(73/73')と(74/74')を比べて見ると、(73/73')のVP2は左側の最も近い名詞句について叙述しているが、丁(1989)が考察している(74/74')のVP2は左側の最も近い名詞句についての叙述ではなく、[V-得]に対する修飾なのである。

- (73)a. 张三 喝得 大醉。 / 張三が飲んで酔っぱらった。
b. 张三 唱得 小明 很烦。 / 張三が歌って、小明がいやになった。
(73')a. 张三 大醉。 / 張三が酔っぱらった。
b. 小明 很烦。 / 小明がいやになった。

- (74)a. 张三 等得 好苦阿。 / 張三が待つのがつらい。
b. 张三 恨得 不得了。 / 張三がものすごく恨んでいる。
c. 张三 包得 快极了。 / 張三が包むのがとても速い。

- (74')a. *张三 好苦阿。 / 張三が苦しい。
b. *张三 不得了。 / 張三が大変だ。
c. *张三 快极了。 / 張三がはやい。

(73)は(73')を含意しているが、(74)は(74')を含意していない。したがって、丁(1989)は結果補語ではなく、様態補語に関する現象を対象としているので、我々の

考察対象とする結果補語を取る[V-得]文の反論にはならないと思われる。

第2に、代名詞の指示という観点からの反論が予想される。[V-得]の右側のNP2とVP2が節であるとすれば、(75)のNP1「张三」はNP2の「他」の同節要素 (clause-mate)ではないので、NP2「他」の指示物は「张三」であつてもよいはずである。しかし、NP2「他」の指示物はNP1「张三」であつてはならないのはなぜかという問題がある。

(75) 张三_i 哭得 [他_{*i/j} 很伤心]。 / 张三が泣いて、彼を悲しませた。

これは同節要素の認定の問題である。まず、ポーズの挿入に関する(76)を見てみよう。

(76)a. 张三说 ^ [他得病了]。

／ 张三は 彼が病気にかかったと言った。

b. 张三说得 [他 ^ 得病了]。

／ 张三が叱った結果、彼が病気にかかってしまった。

c. *张三说得 ^ [他得病了]。

／ 同上。

(76a)の「说(言う)」と「他得病了(彼が病気にかかった)」の間にポーズが挿入される。一方、(76b)の「说得他」と「得病了」の間にはポーズが挿入されるが、(76c)の「说得」と「他得病了」の間にポーズが挿入されない。(77)の代名詞指示を見よう。

(77)a. 张三_i 说 ^ [他_{i/j} 得病了]。 / cf. (76a)

b. 张三_i 说得 [他_{*i/j} ^ 得病了]。 / cf. (76b)

(76)と平行して、ポーズ挿入可能な(76a)の場合の「他」は、(77a)に示すように、「张三」と同一指示可能であるが、ポーズ挿入不可能な(76b)の場合の「他」は、(77b)に示すように、「张三」と同一指示不可能である。もし、ポーズ挿入が格に関する現象であると考えれば、ポーズ挿入と平行する同節要素の認定も格の要因が関わることを示唆する。つまり、(76b)の場合、「他」は[V-得]から格を付与されているから、[V-得]文の主語「张三」と同節要素となると考えられる。同節要素の認定と格との関連性について、詳しくはChomsky(1981)を参照されたい。

この節では、NP2が[V-得]の目的語なのか、それともVP2の主語なのかを見てきた。

[V-得]とNP2の間に格の問題が関わるので、いろいろの複雑な現象があるが、いずれにしても、NP2とVP2に主述関係があることは動かせない事実である。そして、B説をとる積極的な根拠がないため、[V-得]がNP2とVP2を節として取ると考えるのが自然な結論である。

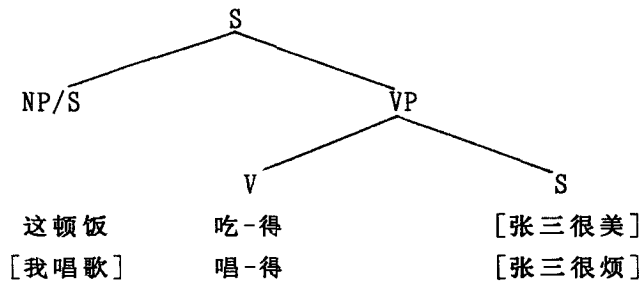
4. 結論

4-1. [V-得]文の構造

この節では、これまでの議論をもとにして、[V-得]文の構造を提案したあと、本論文の構造は従来の構造より、簡潔で説明力を持つことを主張する。

本論文では、[V-得]の構文について、(78)の統語構造を提案する。

(78)



これまでの議論から明らかなように、この構造は、(79)の諸現象を説明することができる。

(79)a. [V-得]とVにおける項体系の不一致(cf. 2-1. 節)

b. [V-得]とVにおける副詞との共起(cf. 2-2. 節)

c. 形式動詞との交替(cf. 2-3. 節)

d. 「被」句にはNP1とVP1が含まれること(cf. 3-1-1. 節)

e. VP1がある場合、NP1とNP2が同節要素ではないこと(cf. 3-1-2. 節)

f. VP1に先行する副詞の作用域が[V-得]には及ばないこと(cf. 3-1-4. 節)

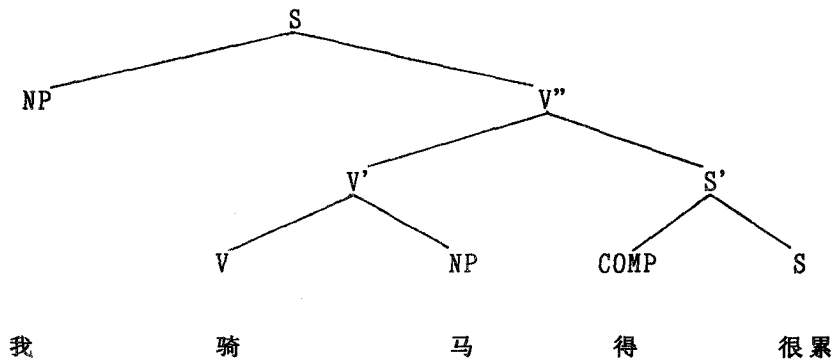
g. VP1と[V-得]の間にポーズが挿入されること(cf. 3-1-3. 節)

h. NP2が現れない場合、文の意味を変えずにその位置に「自己」などが挿入できること(cf. 3-2-1. 節)

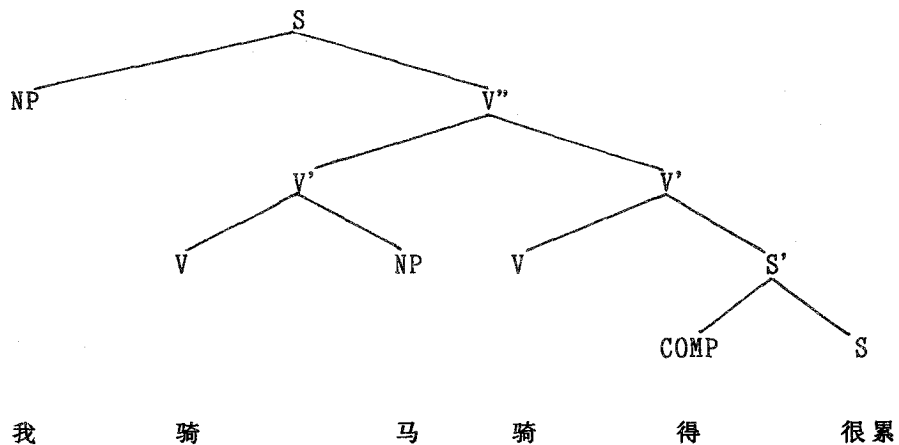
i. NP2とVP2の間の主述関係が、[V-得]構文が文法的であるための条件であること(cf. 3-2-2. 節)

一方、従来、[V-得]のVが動詞であるという説には、Huang(1982)の構造がある。
(80)を見てみよう。

(80)a. D-structure



b. S-structure



Huang(1982)の説明によれば、中国語は「V''」のレベルでhead-finalでなければならないので、(80a)のD構造そのままでは「V''」がhead-initialとなる。そこで、(80b)のS構造では、左側の主動詞「骑」を右側へもう1個反復してその欠陥を克服する。反復した結果、右側の新しい「V'」が「V''」のヘッドであることになる。この提案では、(81)の現象を説明することができると主張されている。

(81)a. (80b)の2つのV'の間にポーズが挿入されること(= (79g))

b. 中国語話者の読みでは、「骑得很累」が文の述語で、「骑马」に修飾の機能

がある。

c. 定動詞に付く「了(完了)」が左側のVに付かないこと。

Huang(1982)の説明では、(81a)は「V'」と「V'」が動詞連続(V'')であるという関係を支持し、(81b)と(81c)は右側の「V'」が「V''」のヘッドであることを支持する。

しかし、(80)の構造では、(79a)～(79f)の現象を説明することができない。そして、一見説明できるような現象(81a)は本当は3-1-3.節で観察したように、(80)の構造では説明できない。というのは、ポーズの挿入が動詞連続の境界を示すのではなく、主述の境界を示すものだからである。(81b)は[V-得]文に対する読みの問題であるが、「我骑马」が「很累」という結果を引き起こしたという読みも可能であろう。この読みが(78)の節主語に反映されている。また、(81c)の「了」が定動詞に付くのは確かであるが、本当に「骑马」の「骑」に付かないだろうか。Huang(1982)は(82)の文を[V-得]文と同じ(80)の構造を持つものとして挙げている。

(82)a. *他 念了书 念三个钟头。 /彼は本を読んだ、三時間読む。

b. *他 开了车 开两次。 /彼は車を運転した、二回運転する。

しかし、(82)が不適格なのは「念」と「开」が定動詞ではないからではなく、意味的な要因による。というのは、(82)は、「张三念书(張三が本を読む)/张三开车(張三が車を運転する)」という行為の完了を先に述べ、その後「念三个钟头(三時間)/开两次(二回)」という行為の過程を述べるという読みだからである。この読みは明らかに時間的な順序に矛盾がある。もし(82)の不適格性が統語的な要因ではなく、意味的な要因であると考えれば、意味的に矛盾が生じなければ、適格な文が存在するはずである。(83)を見てみよう。

(83)a. 张三 骑了 一天 马 骑得 很累。

/張三は一日中馬に乗ったので、疲れた。

b. 张三 吃了 很多 年糕 吃得 胃疼。

/張三はもちをたくさん食べたので、胃が痛い。

(83)は、ある行為を完了したことによって、ある結果を引き起こしたという読みでは、「了」が左側のVにくつついても、適格な文である。さらに、文末にくる「了」も左側のV'の後に来ることでもある。

(84)a. 张三 昨天 骑马了 骑得很累。

／張三は昨日馬に乗ったので、とても疲れた。

b. 张三 昨天 吃年糕了 吃得胃疼。

／張三は昨日もちを食べたので、胃が痛い。

以上の観察からわかるように、Vに後続する「了」も文末にくる「了」も左側のV（またはV'）の後にも来ることができる。この現象は、(80)では説明できないが、(78)では「節主語」で説明することができる。

このように、(78)の構造は従来の構造より多くの現象を説明することができるのである。

4-2. 今後の課題

本論文では、[V-得]がVと異なる動詞であることを主張したが、この主張には、[V-得]が[V1-V2]という複合動詞であることが含意されている。複合動詞については、V1が取る項とV2が取る項がどのように配列されるかという問題がある。本論文で扱っている[V-得]の項体系と「-得」の項体系とは一致するようである(2-4. 節参照)が、ほかの複合動詞の場合、[V1-V2]複合動詞の項体系とV2の項体系とは必ずしも一致しない。

(85)a. 小明 哭烦了 张三。 / 小明が泣いて張三を煩わした。

b. 小明 笑死 张三了。 / 小明が張三を死ぬほど笑わせた。

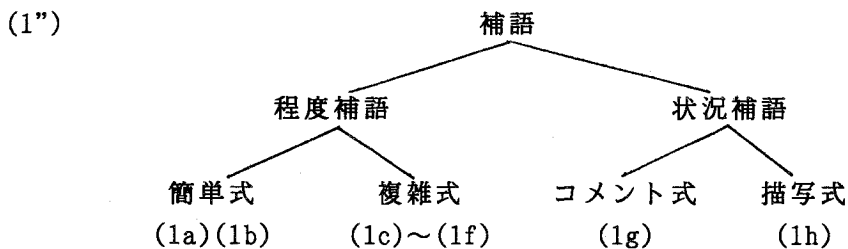
(85a)では、複合動詞「哭烦」が2つの項を取っているが、主語は「哭」の項で、目的語は「烦」の項である。つまり、[V1-V2]の項体系がV2の項体系と一致しない。さらに、(85b)では、「笑死」が2つの項を取っているが、主語が新しい項であり、目的語が「笑」と「死」の項である。これも、[V1-V2]の項体系がV2の項体系と一致しない例である。中国語において、語形成のレベルにおいて、項の位置付けが多様であるが、どのような場合に、どの項の位置付けのパターンが可能であるかについては、今後の課題である。

注：

1) 中国語の[V-得]文については、王・施(1990)は、(1)のように8つのパターンを示している(表記は引用者が一部改めている)。それに対応する例を(1')で例示し、更に、補語の統語・意味構造に基づき、(1'')のように分類している。

| (1) 述語構造の成分 | 補語の文法的意味 |
|-----------------|----------|
| a. Adj-得-Adv | 程度 |
| b. Adj-得-Adj | 程度 |
| c. Adj-得-VP | 程度と結果 |
| d. Adj-得-(N+VP) | 程度と結果 |
| e. V -得-VP | 結果と程度 |
| f. V -得-(N+VP) | 結果と程度 |
| g. V -得-Adj | 状況(コメント) |
| h. V -得-Adj | 状況(描写) |

- (1') a. 他 高兴得 很。 /彼はとても嬉しい。
b. 他 比她年轻得 多。 /彼は彼女よりはるかに若い。
c. 他 高兴得 跳了起来。 /彼は飛び上がるほど嬉しい。
d. 天气 冷得 她直打哆嗦。 /気温が低くて、彼女は震えている。
e. 大伙 笑得 喘不过气来。 /皆は息が苦しくなるほど笑った。
f. 他 逗得 大伙都笑了。 /彼が冗談を言ってみんなを笑わせた。
g. 他 写得 认真。 /彼は書くのがまじめだ(まじめに書く)。
h. 他 走得 慢悠悠的。 /彼はのんびりと歩く。



しかし、(1'')の複雑式はいくつかの点で、他の3類と大きく異なる。統語的には、[V/Adj-得]の補語は節になることができる。他の3類は(3)のように節まで拡張できない(王1946を参照)。

- (2)a. 他 高兴得 [自己跳起来]。 / 彼が嬉しくて自分が飛び上がった。
 b. 天气 冷得 [她直打哆嗦] / cf. (1d)
 c. 大伙 笑得 [人々都喘不过气来] / 皆が笑ってどの人も息が苦しかった。
 d. 他 逗得 [大伙都笑了] / cf. (1f)

- (3)a. *他 高兴得 [自己很]。 / 彼が嬉しくて自分がとても。
 b. *他 比她年轻得 [自己多]。 / 彼が彼女より若くて自分のはるかに。
 c. *他 写得 [自己认真]。 / 彼が何かを書いて自分がまじめだ。
 d. *他 走得 [自己慢悠悠的]。 / 彼が歩いて自分がのんびりしている。

また、(1'')の複雑式の補語は(4)のように2語以上からなる単位でなければならない。しかし、他の3類は(5)のようにその制限がない(呂1963、王・施1990参照)。

- (4)a. *高兴得 跳。 a'. 高兴得 跳起来。 / 嬉しくて飛び上がった。
 b. *笑得 喘气。 b'. 笑得 不停地喘气。 / 笑ってしきりに喘いでいる。
 c. *气得 走。 c'. 气得 走了。 / 怒って行ってしまった。

- (5)a. 高兴得 多。 / ずっと嬉しい。
 b. 笑得 好。 / 具合よく笑った。
 c. 气得 慌。 / とても怒っている。

意味関係から考えても、(1'')の複雑式の補語は結果を表すことができるが、他の3類は結果を表すことができない。そして、複雑式の補語は(1')のように程度を表す場合があるが、程度を表す場合でもその述語の表す行為／状態が現実の実現していなければならない。そういう意味では、他の3類と異なる。

以上、統語的、意味的な方面から見てきたように、(1'')の複雑式は他の3類と異なっている。従って、その複雑式を、他の3類と特に区別して分類する必要があると思われる。この(1'')の複雑式が本論文の扱う結果補語を取る[V-得]構文である。

2) ここで強調したいのは、[V-得]述語説で見れば、(2)は3文とも主語がcauser、補語がresultであるから、その項体系は普通の語順と同じように、項の脱落や位置の変更はないということである。

ただし、Vと「-得」が複合する場合、Vの項が完全に無視されるわけではない。例えば、「小明 打 张三(小明が张三を殴る)」の場合、その「张三」が殴られた結果、「站不起来(立てられない)」というような状況では、(1)のように、「打」

のpatient「张三」が主語の位置に来ることができない。

(1)*张三 打得 站不起来。

任意にVの項を削除したり、項の位置を変えたりすることができるかどうかの問題は、V-V複合動詞内部の問題であるので、本論文の主張するところと矛盾しない。動詞の複合における項の配列については、稿を改めて述べたい。

3) (26b)では、「弄」を「搞」に替えると、一見文法的になる。例えば、

(1)张三 搞了 小明一下。／张三が小明をやっつけた。

しかし、この場合の「搞」は形式動詞ではなく、「やっつける」「謀る」という意味を持つ動詞である。

4) 従来、「-得」に関する見方には、大体、次の3種類がある。

1. [-得]が助詞であるとする説。呂(1980)は、「得de[助] 连接表示程度或结果的补语。基本形式是‘动／形+得+补’。动词不能重叠,不能带‘了、着、过’。(助詞である「得」は程度や結果を表す補語と結び付く。基本形式は‘動／形+得+補’であり、動詞は反復不可能で、‘了、着、過’が後続しない。)」と指摘している。それとほぼ同じ考え方を示しているものに呉(1987)がある。彼は「结构助词“得”。…“得”是构成动补结构的文法手段,不充当句法成分。(「得」は構造助詞である。…「得」は動詞補語構造を形成する文法手段であり、文の成分にならない。)」と指摘している。

2. [-得]が動詞接辞であるとする説。朱(1982)は「表示状态的述补结构里的‘得’则是一个动词后缀。(状態を表す動詞補語構造の「得」は、即ち動詞の接尾辞(suffix)である。)」と指摘している。

3. [-得]の要素がまだ不明であるという説。Chao(1968)は、「得」は「到」が弱化してできたものであると指摘しているが、その「得」がどんな要素であるかを明示していない。Huang(1988)は、“All of these sentences contain the particle DE, which has been historically derived from the verb DE ‘obtain’.

Phonologically, DE is attached to the preceding verb, either as a suffix or a clitic, depending on one’s theory. The syntactic status of DE is itself a controversial matter. I will gloss it simply as DE.”と述べているが、[-得]の役割には殆どふれていない。

謝辞：

本論文は、1990年度京都大学大学院研究報告「中国語の[V-得]文の構造について(1)」をもとに書いたものである。報告論文執筆の際、言語学科の西田龍雄先生、佐藤昭裕先生、吉田和彦先生からご教示を頂いた。ここに記して、謝意を表したい。そして研究室の諸氏、特に岸田泰浩氏、上山あゆみ氏から貴重なご助言を頂き、感謝する次第である。

参考文献：

- 丁恒顺. 1989. 「“N1+V得+N2+VP” 句式」『中国语文』3期。
- 范 晓. 1985. 「略论V-R」中国语文杂志社编『语法研究和探索3』北京大学出版社。
- 李临定. 1980. 「动补格句式」『中国语文』2期。
- . 1984. 「究竟那个“补” 那个?——动补格关系再议」『汉语学习』2期。
- 林 涛. 1962. 「现代汉语轻声和句法结构的关系」『中国语文』7期。
- 吕淑湘. 1963. 「现代汉语单双音节问题初探」『中国语文』1期。
- . 1979. 『汉语语法分析问题』商务印书馆。
- . 1980. 『现代汉语八百词』商务印书馆。
- 刘世荣. 1954. 「关于动补结构问题」『中国语文』11期。
- 施关金. 1985. 「关于助词“得”的几个问题」中国语文杂志社编『语法研究和探索3』北京大学出版社。
- 汤廷池. 1989. 『汉语词法句法续集』台湾学生书局。
- 王 力. 1946. 『中国语法理论』商务印书馆。
- . 1985. 『中国现代语法』商务印书馆。
- 王邱丕・施建基. 1990. 「程度与情状」『中国语文』6期。
- 吴为章. 1987. 「“X得”及其句形——兼谈动词的“向”」『中国语文』3期。
- 张国宪. 1988. 「结果补语语义指向分析」『汉语学习』。
- 张寿康. 1957. 「略论汉语构词法」『中国语文』6期。
- 朱德熙・吕叔湘. 1951. 『语法修辞讲话』开明书店。
- 朱德熙. 1982. 『语法讲义』商务印书馆。
- 中国社会科学院语言研究所词典编辑室. 1979. 『现代汉语词典』商务印书馆。
- 田口善久. 1989. 「现代中国語の補語をともなう“得”の解釈について」『東京大学言語学論集'89』(東京大学言語学研究室)。
- 塚本秀樹. 1987. 「日本語における複合動詞と格支配」『言語学の視界——

小泉保教授還暦記念論文集』大学書林。

寺村秀夫. 1982. 『日本語のシンタクスと意味1』くろしお出版。

長嶋善郎. 1976. 「複合動詞の構造」鈴木孝夫編『日本語の語彙と表現』
大修館書店。

早津恵美子. 1989. 「有対他動詞と無対他動詞の違いについて——意味的な特徴を
中心に」『言語研究』95。

松村一登. 1987. 「マリ(チェレミス)語の複合動詞——日本語の複合動詞との
比較——」『言語学の視界——小泉保教授還暦記念論文集』大学書林。

望月圭子. 1990. 「日/中両語の結果を表す複合動詞」『東京外国語大学論集』
40号。

Chao, Y-R. 1968. A Grammar of Spoken Chinese. University of California
Press. (赵元任. 『汉语口语语法』1979. (吕叔湘译)商务印书馆.)

Chomsky, N. 1981. Lectures on Government and Binding. Foris.

Hashimoto, A. 1971. Mandarin Syntactic Structures. Ms. (アン・Y・ハシモト.
『中国語の文法構造』1986. (中川正之、木村英樹訳)白帝社.)

Huang, C.-T. J. 1982. Logical Relations in Chinese and the Theory of
Grammar. Ph.D. dissertation, MIT.

Huang, C.-T. J. 1988. "Wo Pao De Kuai and Chinese Phrase Structure." Language, 64-2.

Kageyama, T. 1984. "Three Types of Word Formation." Nebulae Vol.10.

Li, C.N. and S.A. Thompson. 1981. Mandarin Chinese--A functional
reference grammar. University of California Press.

Li, Y-f. 1990. "On V-V Compounds in Chinese." Natural Language &
Linguistic Theory 8-2.

Miyagawa, S. 1989. Structure and Case Marking in Japanese. (Syntax and
Semantics 22.) Academic Press.

(しんりき、博士後期課程)